

作業室用

茨城県教育財団文化財調査報告第112集

常磐新線建設工事地内  
埋蔵文化財調査報告書 1

原 遺 跡  
沼 崎 遺 跡

平成8年3月

日本鉄道建設公団 関東支社  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第112集

# 常磐新線建設工事地内 埋蔵文化財調査報告書 1

はら 遺 跡  
ねま さき 沼 崎 遺 跡

平成 8 年 3 月

日本鉄道建設公団 関東支社  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県南部地域は、埼玉県、千葉県とともに、人工の増加が著しく、住宅等の開発が急速に進んで、通勤通学の遠距離化、長時間化を余儀なくされております。しかし、東京圏北東部と東京都心を結ぶ運送手段としての鉄道は、現在、JR常磐線だけに依存しており、常磐線の混雑度が異常な状況となっております。したがって、この解消が首都圏の交通事情の緩和のみならず、社会、経済の円滑な発展につながるものとして、その交通<sup>たうつう</sup>輻<sup>ふく</sup>湊<sup>そう</sup>の抜本的な解決が望まれているところであります。

このような背景の中で、鉄道混雑の緩和、宅地の供給のみならず、沿線地域の産業基盤の整備、区画整理・再開発等による地域の活性化及び核都市の発展を促進することを目的として、常磐新線の建設工事が計画されました。その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である原遺跡、沼崎遺跡が所在しております。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、日本鉄道建設公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成7年10月から平成8年1月にかけて、発掘調査を実施してまいりました。

本書は、原遺跡、沼崎遺跡の調査成果を収録したものであり、本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本鉄道建設公団には、多大な御協力をいただきましたことに対し厚くお礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、守谷町教育委員会、谷和原村教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成8年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 橋本 昌

## 例 言

1 本書は、日本鉄道建設公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成7年10月1日から平成8年1月24日まで実施した筑波郡谷和原村大字簡戸字原3,122番地ほか所在の原遺跡及び北相馬郡守谷町大字守谷甲字沼崎1,775番地所在の沼崎遺跡の発掘調査報告書である。

2 原遺跡及び沼崎遺跡の調査及び整理に関する教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	小 林 秀 文	平成6年4月～	
	中 島 弘 光	平成7年4月～	
常 務 理 事	一 木 邦 彦	平成7年4月～	
事 務 局 長	齋 藤 紀 彦	平成7年4月～	
埋 藏 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～	
埋 藏 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 業 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎	平成7年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～
	主 任	小 池 孝	平成7年4月～
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
調 査 課	第 二 課 長	阿 久 津 久	平成7年4月～
	第 一 班 長	後 藤 哲 也	平成7年4月～
	主 任 調 査 員	小 高 五 十 二	平成7年10月～平成8年1月調査, 平成8年1月～3月整理・執筆・編集
	主 任 調 査 員	松 浦 敏	平成7年10月～平成8年1月調査, 平成8年1月～3月整理・執筆・編集

3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。

4 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

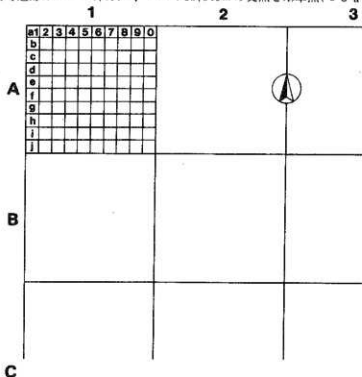
## 5 遺跡の概略

ふりがな	じょうばんしんせんけんせつこうじちないまいぞうぶんかざいちょうさほうくしよ						
書名	常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書題	原遺跡 沼崎遺跡						
巻次	1						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第112集						
編著者名	小高 五十二 松浦 敏						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 ☎ 029(225)6587						
発行年月日	1996(平成8)年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地						
原遺跡	茨城県筑波郡 谷和原村筒戸 3,122番地ほか	08483 —	35度 57分 34秒	140度 0分 13秒	19951001~ 19960124	7,126㎡	常磐新線建設工事 (車両基地)に伴う 調査
沼崎遺跡	茨城県北相馬郡 守谷町守谷甲 1,775番地	08561 —	35度 57分 32秒	140度 0分		2,779㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
原遺跡	築落跡 古墳	縄文時代 (早期-中期)	竪穴住居跡 1軒 炉穴 15基 陥し穴 1基 土坑 17基		縄文式土器片 石鏃	北側に小貝川を臨む標 高約17mの台地上に位 置する。古墳は、前方 後円墳で、埋井施設は 竪穴式石棺である。	
		古墳時代 (後期)	古墳 1基		須恵器片 鉄鏃、鈔、小刀		
		近代	溝 1条				
		不明	土坑 1基 井戸 1基 溝 3条				
沼崎遺跡	散布地	不明	土坑 9基		縄文式土器片		

# 凡 例

- 1 原遺跡及び沼崎遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅱ系を原点とした。原遺跡は $X = -4,440\text{m}$ 、 $Y = +15,360\text{m}$ の交点を基準点(B11a1)、沼崎遺跡は $X = -4,480\text{m}$ 、 $Y = +15,040\text{m}$ の交点を基準点(C3a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西及び南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C・・・、西から東へ1、2、3・・・とし、「A1区」、「B2区」・・・のように呼称した。小調査区も同様に、北から南へa、b、c・・・j、西から東へ1、2、3・・・0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。(第1図)



第1図 調査呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 土坑-S K 古墳-T M 溝-S D ビット-P<sub>1</sub>~

遺物 土器-P 石器-Q 金属製品-M 拓本土器-T P 攪乱-K

- 3 遺構、遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



炉・石(雲母片岩)



粘土



焼土・鎮推土器

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺構、遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にスケールで表示した。
- 「主軸方向」は、刃をとおる軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例  $N-10^{\circ}-E$ 、 $N-10^{\circ}-W$ )  
なお、( )は実測値、[ ]を付したものは推定値である。

# 目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 原遺跡	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	7
1 縄文時代の遺構と遺物	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) カマ穴	9
(3) 陥し穴	15
(4) 土坑	16
(5) 遺構外出土遺物	20
2 古墳時代の遺構と遺物	26
3 その他の遺構	34
(1) 溝	34
4 まとめ	35
第4章 沼崎遺跡	37
第1節 遺跡の概要	37
第2節 基本層序	37
第3節 遺構と遺物	37
1 土坑	38
2 遺構外出土遺物	39
3 まとめ	39

## 挿 図 目 次

第1図 調査呼称方法概念図	第16図 遺構外出土遺物拓影図(2)	23
第2図 周辺遺跡分布図	第17図 遺構外出土遺物拓影図(3)	24
原遺跡	第18図 遺構外出土遺物実測・拓影図	25
第3図 原遺跡全体図	第19図 第1号古墳墳形想定図	26
第4図 原遺跡基本土層図	第20図 第1号土層断面図(1)	27
第5図 第1号住居跡実測図	第21図 第1号土層断面図(2)	28
第6図 第1号住居跡出土遺物拓影図	第22図 第1号古墳主体部実測図(1)	30
第7図 炉穴実測図(1)	第23図 第1号古墳主体部展開図	31
第8図 炉穴実測図(2)	第24図 第1号古墳主体部実測図(2)	32
第9図 炉穴出土遺物拓影図	第25図 第1号古墳出土遺物実測・拓影図	33
第10図 陥し穴出土遺物拓影図	第26図 第1-4号溝土層断面図	35
第11図 陥し穴・土坑実測図	沼崎遺跡	
第12図 土坑実測図	第27図 沼崎遺跡全体図	37
第13図 土坑・井戸実測図	第28図 沼崎遺跡基本土層図	37
第14図 土坑出土遺物拓影図	第29図 土坑実測図	38
第15図 遺構外出土遺物拓影図(1)	第30図 遺構外出土遺物拓影図	39

## 表 目 次

表1 原遺跡、沼崎遺跡周辺遺跡一覧表	4	表4 遺構外遺物観察表	25
表2 炉穴一覧表	16	表5 第1号古墳出土遺物観察表	32・33
表3 原遺跡土坑一覧表	20	表6 沼崎遺跡土坑一覧表	39

## 写真図版目次

P L 1 沼崎遺跡・原遺跡俯瞰、原遺跡全景	P L 6 第25号土坑〔手前〕、第1号溝〔左奥〕、 第2号溝〔右奥〕、第3号溝、第1号陥し穴
P L 2 第1号古墳、第1号古墳主体部俯瞰	P L 7 第2・3・5・9・10・12炉穴、第33・27土 坑
P L 3 第1号古墳主体部俯瞰(底部)、第1号古墳 主体部(北西より)	P L 8 出土遺物(S I I, S K 4・6、遺構外)
P L 4 第1号古墳主体部及び掘り方俯瞰、第1号古 墳主体部表石及び側石の掘り方(北東より)、 第1号古墳Bベルト土層断面図	P L 9 出土遺物(遺構外, T M 1)
P L 5 第1号住居跡、第1号住居跡P <sub>1</sub> (北より)、 第1号住居跡P <sub>2</sub> 〔手前〕、P <sub>2</sub> 〔後方〕(北 東より)	P L 10 調査終了状況、第1号土坑、第6号土坑土層 断面図、遺構外出土遺物



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

東京圏の人口増加は、圏域全体では次第に鈍化してきているものの、周辺部においては依然として増加が著しく、特に、茨城県南部、埼玉県、千葉県等圏域の北東部地域で人口の増加が著しくなっている。これにより、通勤通学の逐距離化、長時間化が急速に進んでおり、東京の通勤圏は半径100km圏に拡大しようとしている。このような状況の中で、鉄道混雑の緩和、宅地の供給のみならず、沿線地域の産業基盤の整備、区画整理・再開発等による地域の活性化及び核都市の発展を促進することを目的として、常勢新線の建設が計画された。

平成6年11月17日、日本鉄道建設公団東京支社（平成7年10月1日付けで、東京支社から関東支社に変更）は、茨城県教育委員会に対し、常勢新線建設工事区内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は、平成6年11月22日、現地踏査を実施し、工事予定地内に原遺跡（谷和原村）、沼崎遺跡（守谷町）の存在を確認した。茨城県教育委員会は、平成7年3月10日、文化財保護の立場から日本鉄道建設公団東京支社と遺跡の取り扱いについて協議をし、現状保存が困難であることから、発掘調査による記録保存の措置を講じることにし、日本鉄道建設公団東京支社に調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

当教育財団は、日本鉄道建設公団東京支社と詳細な調整を重ね、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託計画を結び、平成7年10月1日から平成8年1月24日にかけて、原遺跡、沼崎遺跡の発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

原遺跡、沼崎遺跡の発掘調査は、平成7年10月1日から平成8年1月24日まで実施した。以下、調査の経過について、その概要を記述する。

- 10月 発掘調査をするための諸準備を行い、倉庫及び休憩所を設置し、9日から原遺跡と沼崎遺跡の試掘作業を開始した。原遺跡は、17日から古墳調査を開始し、30日からは重機による表土除去を始めた。
- 11月 原遺跡は、遺構確認作業と古墳調査を並行して進め、16日には表土除去を終了した。沼崎遺跡は、17日から28日にかけて重機による表土除去を行い、30日から遺構確認作業を行った。20日には、基壇杭打ち（茨城県建設技術公社に委託）を実施した。
- 12月 原遺跡は、4日から古墳、12日から住居跡と溝、15日から土坑の調査を開始した。
- 1月 原遺跡は、先月に続いて遺構調査を実施し、17日に堅穴住居跡1軒、土坑3基、溝4条、井戸1基、古墳1基の調査を終えた。沼崎遺跡は、16日から遺構調査を実施し、17日に土坑9基の調査を終えた。また、17日には両遺跡の航空写真撮影を実施した。18日から両遺跡の補足調査、遺物の洗浄及び注記、調査現場の撤収作業を行い、24日に現地調査を終了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

原遺跡は、筑波郡谷和原村大字筒戸字原3,122番地ほかに所在する。沼崎遺跡は、北相馬郡守谷町大字守谷甲字沼崎1,775番地に所在する。

原遺跡が所在する谷和原村は、茨城県の南西部に位置し、南部は守谷町、伊奈町に、北部は水海道市、つくば市に接している。地形は、鬼怒川と、これに平行して南流する小貝川によって造られた沖積低地が大部分を占め、北東部と南西部は、洪積土の常総台地の一部から成っている。原遺跡は、谷和原村の南端部に位置し、北側に小貝川、北西から南東にかけては小貝川に沿って広がる低地を臨む標高17mの台地上に立地している。現況は山林である。

沼崎遺跡が所在する守谷町は、北部は谷和原村及び、小貝川をはさみ伊奈町と接し、東部は取手市に、西部は水海道市に、南部は利根川を境に千葉県野田市と柏市に接している。地形は、北西から南東に至る中央部は、北相馬台地と呼ばれる海抜約20mの洪積土の平坦な台地である。利根川、小貝川の河川沿いは、耕地に亘した肥沃な沖積土の低地になっている。これらの低地は、沖積世の湾入海岸線を示し、これら海成沖積層の周辺には多くの貝塚が分布している。沼崎遺跡は、守谷町の北端部に位置し、標高12mの台地斜面部に立地している。現況は、山林である。両遺跡は約300m離れているが、その間には小貝川に沿って広がる低地が位置している。

#### 参考文献

- (1) 蜂須 紀夫 「茨城県 地学のガイド」 1986年11月
- (2) 茨城県 「茨城県史 市町村編Ⅱ」 1975年3月
- (3) 守谷町 「守谷町史」 1985年3月

## 第2節 歴史的環境

原遺跡、沼崎遺跡の周辺に所在する遺跡を、時代ごとに記載し、歴史的変遷について述べることにする。

旧石器時代の遺跡としては、当教育財団が調査した筒戸A遺跡(9)、筒戸B遺跡(10)があり、チャート黒色流紋岩製のナイフ型石器2点や黒曜石の剥片などが出土している。

縄文時代の遺跡は、早期から後期末まで確認されている。早期の遺跡としては、洞坂畑遺跡(3)、西下宿遺跡(8)、今城遺跡(46)がある。西下宿遺跡は、縄文時代早期の田戸式から茅山式期の土器片を主として出土した。前期の遺跡は、間山式期の浅間山貝塚(5)、鈴塚C遺跡(36)、郷州原遺跡(21)が知られている。中期になると遺跡の数は増加し、大谷津A遺跡(6)、大谷津B遺跡(7)、筒戸A遺跡、筒戸B遺跡がある。大谷津A遺跡は、中期の阿土台～加曾利F式期の集落跡である。大谷津B遺跡は、加曾利EⅡ～Ⅳ式期の集落跡である。また、大谷津B遺跡の南側に隣接する筒戸A遺跡、筒戸B遺跡もほぼ同時期の集落跡である。これらの4遺跡は、いずれも谷津に沿った台地上の平坦地に所在している。後期の遺跡としては、高野A(大日)遺跡(37)があり、住居跡が1軒確認されている。

弥生時代の遺跡は、郷州原遺跡と高野A(大日)遺跡、法花坊遺跡(13)が知られている。

古墳時代の遺跡は、茶畑古墳(4)、同地古墳群(15)、市之代古墳群(17)、庚塚遺跡(12)などの古墳が確認されている。庚塚遺跡は小規模な前方後円墳とされているが、他の古墳は円墳である。原遺跡の南東約2Km地点には、同地古墳群と市之代古墳群が隣接している。同地古墳群では円墳が3基確認されている。集落跡としては、高野E(乙子)遺跡(44)、法花坊遺跡、高野F・G(北今城)遺跡(43・45)、高野A(大日)遺跡、甲B(仲原)遺跡(39)、今城遺跡、郷州原遺跡が知られている。法花坊遺跡では、4軒の和泉期の竪穴住居跡が確認され、製鉄や鉄加工のための窯が発見されている。郷州原遺跡では、前期の住居跡が9軒、後期が22軒発見されている。

奈良・平安時代の遺跡は、報告例が少なく、大谷津A遺跡、筒戸A・B遺跡、今城遺跡から数軒の竪穴住居跡が確認されているにすぎない。

中・近世の遺跡は、筒戸城跡(11)、守谷城跡(14)、法花坊遺跡が確認されている。

※ 本文中の( )内の番号は、表1、第2図中の該当番号と同じである。

### 注・参考文献

- (1) 洞坂畑遺跡発掘調査会 「洞坂畑遺跡」 1979年3月
- (2) 御英城県教育財団 「北海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 大谷津B遺跡」 1981年3月
- (3) 御英城県教育財団 「北海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 筒戸A遺跡、筒戸B遺跡」 1984年3月
- (4) 御英城県教育財団 「北海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡」 1985年3月
- (5) 御英城県教育財団 「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 西ノ脇遺跡、前山村遺跡」 1994年3月
- (6) 御英城県教育財団 「南守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 乙子遺跡、北今城遺跡、大日遺跡、庄内遺跡、笹根入・仲原遺跡、鈴塚B・C遺跡、鈴塚古墳群、今城遺跡」 1981年3月

- (7) 茨城県北守谷遺跡調査会 「北守谷遺跡」 1976年3月
- (8) 同地古墳発掘調査会 「同地第3号墳発掘調査報告書」 1985年12月
- (9) 守谷東遺跡発掘調査会 「城内遺跡、法花坊遺跡」1991年6月
- (10) 守谷町 「守谷町史」 1985年3月
- (11) 「茨城県地名大辞典」 角川書店 1983年12月

表1 原遺跡、沼崎遺跡周辺遺跡一覧表

番号	原遺跡番号	名称	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	鎌倉以降	番号	原遺跡番号	名称	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	鎌倉以降
1		原遺跡		○		○			24	5604	山王作遺跡		○				
2		沼崎遺跡		○					25	5603	貝塚新田遺跡					○	
3	2139	洞坂畑遺跡		○				○	26	5606	神明遺跡		○				
4		茶畑古墳				○			27	5608	前新田遺跡		○				
5	2140	浅間山貝塚		○					28	5609	大塚遺跡		○				
6	5852	大谷津A遺跡		○		○			29	5607	上高井城塚古墳群					○	
7	5853	大谷津B遺跡		○					30	5631	出土遺跡						○
8	5854	西下宿遺跡		○					31	3613	高野H遺跡					○	
9	5855	筒戸A遺跡	○	○				○	32	2577	五十塚古墳					○	
10	5856	筒戸B遺跡	○	○				○	33	3619	鈴塚古墳群					○	
11	5851	筒戸城跡						○	34	3614	鈴塚A(座内)遺跡					○	
12	2580	庚塚遺跡				○			35	3615	鈴塚B遺跡					○	
13		法花坊遺跡			○	○		○	36	3616	鈴塚C遺跡		○		○		
14	2578	守谷城跡		○		○		○	37	3606	高野A(大日)遺跡		○	○	○		
15	2575	同地古墳群				○			38	3617	甲A(篠根入)遺跡					○	
16	2576	同地貝塚		○					39	3618	甲B(仲原)遺跡					○	
17	2587	市之代古墳群				○			40	3608	高野C遺跡					○	
18	5611	奥山道台遺跡				○			41	3607	高野B遺跡					○	
19	5612	麻宮神社遺跡		○					42	3609	高野D遺跡					○	
20	5610	上川辺遺跡		○					43	3612	高野C(北今城)遺跡					○	
21		郷州原遺跡		○	○				44	3610	高野E(乙子)遺跡					○	
22	5605	台坪遺跡		○					45	3611	高野F(北今城)遺跡					○	
23	5602	向山Ⅱ遺跡				○			46	4073	今城遺跡		○		○	○	



第2図 周辺遺跡分布図

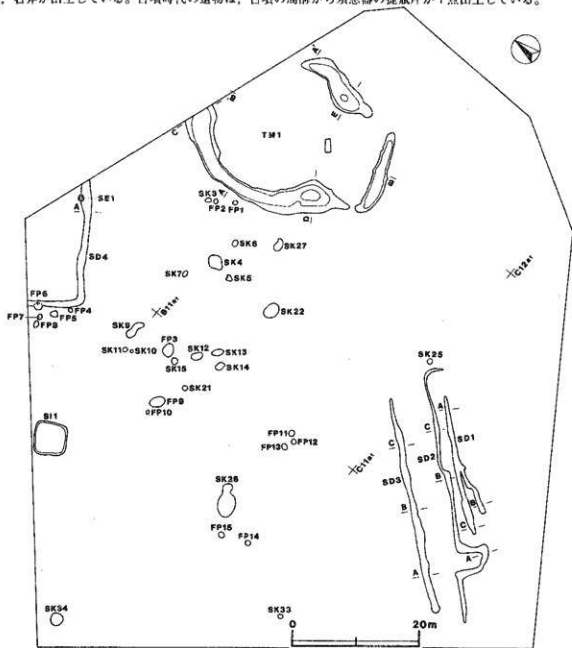
### 第3章 原 遺 跡

#### 第1節 遺跡の概要

原遺跡は、谷和原村の南端部に位置し、北側に小貝川、北西から南東にかけては小貝川に沿って広がる低地を臨む標高約17mの台地上に立地している。現況は山林で、面積は7.126㎡である。

今回の調査によって確認した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、炉穴15基、陥し穴1基、土坑17基、古墳時代後期の古墳1基、近代の溝1条、時期不明の土坑1基、井戸1基及び溝3条である。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に14箱出土している。縄文時代の遺物は、早期から中期の土器片、石楯、石斧が出土している。古墳時代の遺物は、古墳の崩溝から須恵器の提瓶片が1点出土している。

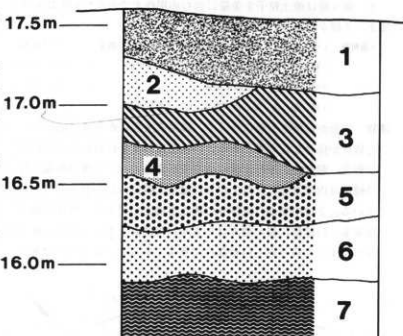


第3図 原遺跡全体図

## 第2節 基本層序

調査区の南西部、C10b<sub>1</sub>区に基本土層図を設定し、第4図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、厚さ約20～45cmの明褐色土で、ローム粒子、炭化粒子を微量含む表土である。第2層は、厚さ約15～30cmの褐色土で、ローム粒子、ローム小ブロックを極少量含む、ソフトローム層への漸移層である。第3層は、厚さ約30～70cmの褐色土で、ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含むソフトローム層である。第4層は、厚さ約10～25cmの褐色土で、ローム粒子及びローム小ブロックを微量、ローム大ブロックを少量含むソフトローム層である。第5層は、厚さ約20～40cmの褐色土で、ローム大ブロックを多量に含む、締まりの強いハードロー



第4図 原遺跡基本土層図

ム層である。第6層は、厚さ約30～45cmの暗褐色土で、ブラックバンドである。第7層は、厚さ約20～30cmの褐色土で、ローム小～大ブロックを少量含むハードローム層である。

## 第3節 遺構と遺物

### 1 縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居跡

当遺跡から確認された竪穴住居跡は1軒で、調査区の西端に位置している。

#### 第1号住居跡（第5・6図）

位置 調査区西部、A10j<sub>4</sub>区。

規模と平面形 長軸5.66m、短軸4.90mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-62°-E。

壁 壁高は14～28cmで緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 凹凸があり、全体的に堅く踏み固められている。

ピット 4か所（P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、長径38～94cm、短径29～70cmの楕円形で、深さは18～19cmある。

P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>は、主柱穴、P<sub>4</sub>は、炉1構築以前のもので、P<sub>2</sub>とともに主柱穴であったと思われる。

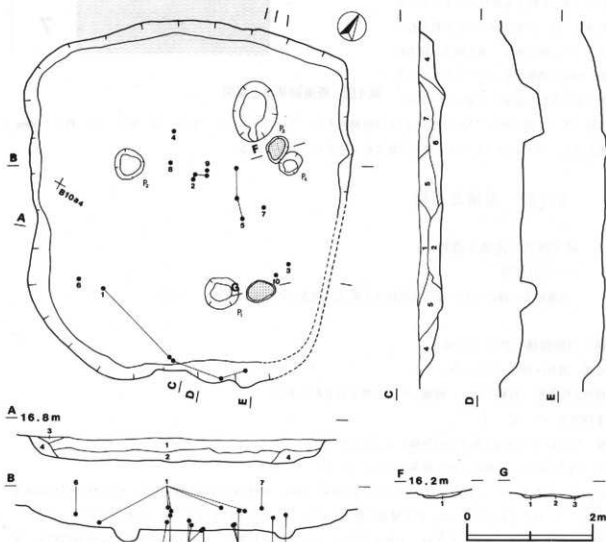
炉 2か所（炉1、2）。炉1は、中央から北コーナー寄りに位置し、長径42cm、短径32cmの楕円形で、床面を8cm程掘り窪め、P<sub>4</sub>の上面に構築している。覆土は、1層からなり、ローム粒子、焼土粒子及び焼土小

ブロックを少量含む暗赤褐色土である。炉2は、中央から東コーナー寄りに位置し、長径58cm、短径36cmの楕円形で、床面を3cm程掘り窪めている。覆土は、3層からなり、自然堆積である。第1層はローム粒子及び焼土粒子を少量含むにぶい赤褐色土、第2層は焼土粒子を多量と焼土小ブロックを少量含むにぶい赤褐色土、第3層は焼土粒子を多量に含む赤褐色土である。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 7層からなり、人為堆積である。

土層解説	1層 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。	5層 暗褐色 ローム粒子多量。
	2層 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子中量。	6層 暗褐色 ローム粒子少量。
	3層 褐色 焼土粒子微量。	7層 褐色 ローム粒子・小ブロック少量。
	4層 褐色 焼土粒子微量、ローム粒子少量。	

遺物 床面から覆土層にかけて、縄文式土器片が多量に出土している。1は南壁付近の覆土層から出土した破片が接合したものである。口縁部は外反し口唇部は外削状をしている。胴部上位は口縁部直下から変形爪形文、刺突文、平行沈線による変形文によって文様が構成されている。2は中央部床面から出土している。口縁部は内彎気味に立ち上がり口縁部に斜位の刻み目をもつ。口縁部直下から多段にわたり凹凸文が施されている。3は中央から東寄りの覆土層から出土した波状口縁部片で、口縁部は外反して立ち上がり口唇部は尖る。口縁部に短い刻み目をもち口縁部直下から三角文が施されている。4は中央から北寄りの覆土層から出土した折り返し口縁部片で無文である。5は中央から東寄りの覆土下層及び上層から出土した破片が

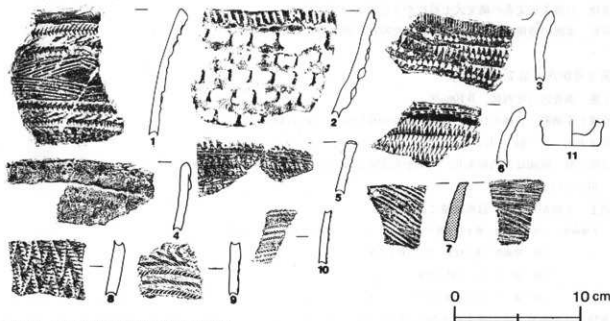


第5図 第1号住居跡実測図



接合した口縁部片である。口縁部に棒状工具の押圧による刻み目をもち、口縁部直下から貝殻波状文と刺突文が施されている。6は南西コーナー付近の覆土中層から出土した口縁部片である。口縁部には2条の結節沈線文が施され、口縁部直下から貝殻波状文が充填されている。7は中央から東寄りの覆土上層から出土した口縁部片で、内外面に貝殻状痕文が施されている。8は中央部覆土下層から出土した胴部片で、貝殻波状文が施されている。9は中央部床面、10は南東コーナー覆土中央から出土した胴部片で、9には曲線的な浮線文が、10には直線的な浮線文がはられ、その上に刻み目が施されている。11は底径4.2cmの小形土器の部片で覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代前期後葉の住居跡と考えられる。



第6図 第1号住居跡出土遺物拓影図

## (2) 炉穴(表2)

当遺跡において、当初、土坑としてとらえ調査したものは、第1～34号の34基である。そのうち、調査及び整理の過程で、第1, 2, 8, 16～20, 23, 24, 28～32号については炉穴(第1～15号炉穴)、第22号については陥し穴(第1号陥し穴)、他はその他の土坑と判断し、炉穴についてはここで、陥し穴については(3)で、その他の土坑については(4)で報告する。

## 第1号炉穴(第7図)

位置 調査区の北西部、A11js区。

規模と平面形 長軸0.88m、短軸0.66mの楕円形で、深さは12cmである。

長径方向 N-40°-W。

底面と壁 底面は浅い皿状で、中央部から南東側の壁面は火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 5層からなり、人為堆積である。

土層解説 1層 橙 色 焼土粒子中量、ローム粒子少量。

4層 橙 色 焼土粒子中量、ローム粒子少量。

2層 明赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子微量。

5層 明褐色 焼土・ローム粒子微量。

3層 赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子中量。

遺物 第1層から貝殻痕文系の縄文式土器片が1点出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

### 第2号炉穴（第7図）

位置 調査区の北西部，A11j s区。

規模と平面形 長軸0.88m，短軸0.76mの楕円形で，深さは14cmである。

長径方向 N-2°-W。

底面と壁 底面は浅い皿状で，火熱を受けて赤変している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなり，自然堆積である。

土層解説 1層 黄褐色 焼土小・中ブロック，ローム粒子少量。

2層 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。

遺物 貝殻条痕文系の縄文式土器片が2点出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

### 第3号炉穴（第7・9図）

位置 調査区の北西部，B10b区。

規模と平面形 長軸2.18m，短軸1.90mの楕円形で，深さは45cmである。

長径方向 N-84°-E。

底面と壁 底面は凹凸があり，中央から北東寄りには特に火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり，自然堆積である。

土層解説 1層 黄褐色 焼土粒子及びローム中・大ブロック微量，ローム粒子少量。

2層 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量。

3層 褐色 ローム粒子少量。

4層 褐色 ローム粒子及びローム小・中ブロック少量。

遺物 貝殻条痕文系の縄文式土器片が19点出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

### 第4号炉穴（第7図）

位置 調査区の北西部，A10ha区。

規模と平面形 長軸0.76m，短軸0.74mの円形で，深さは12cmである。

長径方向 N-5°-W。

底面と壁 底面は凹凸があり，中央部は火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 1層からなり，自然堆積である。

土層解説 1層 明赤褐色 焼土粒子及び焼土小・大ブロック多量。

遺物 貝殻条痕文系の縄文式土器片が1点出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

### 第5号炉穴（第7図）

位置 調査区の北西部，A10ga区。

規模と平面形 長軸1.32m，短軸0.80mの不整形円形で，深さは8cmである。

長径方向 N-42°-W。

底面と壁 底面は平坦で，中央から南東よりは火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層からなり，自然堆積である。

- 土層解説 1層 黄褐色 ローム中ブロック少量。  
2層 褐色 焼土粒子・大ブロック及びローム中ブロック中量。  
3層 暗褐色 焼土粒子・小ブロック少量、焼土中ブロック中量。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが、底面が焼土化していること及び隣接する第4、8号炉穴等との比較から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。

#### 第6号炉穴（第7・9区）

位置 調査区の北西部，A10g区。

規模と平面形 長軸1.40m，短軸〔1.15〕mの不定形をしていたものと考えられる。深さは10cmである。

重複関係 本跡の北東壁付近は、第4号溝に掘り込まれている。

長径方向 N-34°-W。

底面と壁 底面は門凸があり，全体的に火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり，自然堆積である。

- 土層解説 1層 褐色 焼土粒子少量。  
2層 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量。  
3層 褐色 ローム粒子微量。  
4層 赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量。

遺物 条痕文系の縄文式土器片が8点出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

#### 第7号炉穴（第7区）

位置 調査区の北西部，A10g区。

規模と平面形 長軸1.07m，短軸0.76mの楕円形で，深さは12cmである。

長径方向 N-55°-W。

底面と壁 底面は門凸があり，全体的に火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなり，自然堆積である。

- 土層解説 1層 褐色 焼土粒子・ローム粒子微量。  
2層 鮮赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック及び炭化粒子微量。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが，隣接する第6号炉穴等との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

#### 第8号炉穴（第7区）

位置 調査区の北西部，A10g区。

規模と平面形 長軸1.34m，短軸0.84mの楕円形で，深さは14cmである。

長径方向 N-39°-E。

底面と壁 底面は平坦で，中央から北東寄りには火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなり，自然堆積である。

- 土層解説 1層 暗褐色 焼土粒子・小ブロック及びローム粒子少量。  
2層 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子・小ブロック少量。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが、隣接する炉穴との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

#### 第9号炉穴（第7図）

位置 調査区の北西部，B10ca区。

規模と平面形 長軸2.40m，短軸1.55mの不等楕円形で，深さは8cmである。

長径方向 N-40°-W。

底面と壁 底面は凹凸があり，中央部は火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 5層からなり，自然堆積である。

- |                          |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| 土層解説 1層 褐色 焼土粒子・ローム粒子中量。 | 4層 明赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量。 |
| 2層 赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量。   | 5層 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子中量。 |
| 3層 赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック少量。 |                       |

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが，当遺跡で確認した他の炉穴との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

#### 第10号炉穴（第7・9図）

位置 調査区の北西部，B9c7区。

規模と平面形 長軸0.65m，短軸0.45mの楕円形で，深さは8cmである。

長径方向 N-74°-E。

底面と壁 底面は平坦で，中央部から南西側の壁面にかけて火熱を受け赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 1層からなり，自然堆積である。

- 土層解説 1層 赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック少量。

遺物 縄文式土器片が4点出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

#### 第11号炉穴（第7図）

位置 調査区の南西部，B10ha区。

規模と平面形 長軸1.08m，短軸0.99mの楕円形で，深さは21cmである。

長径方向 N-56°-W。

底面と壁 底面は凹凸があり，中央部から東側の壁面にかけて火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなり，自然堆積である。

- |                            |
|----------------------------|
| 土層解説 1層 褐色 焼土粒子少量，ローム粒子中量。 |
| 2層 褐色 ローム粒子中量。             |

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが，当遺跡で確認した他の炉穴との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

### 第12号炉穴（第7図）

位置 調査区の南西部，B10h<sub>0</sub>区。

規模と平面形 長軸0.88m，短軸0.74mの楕円形で，深さは14cmである。

長径方向 N-46°-W。

底面と壁 底面は平坦で，中央部は火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説 1層 橙 色 焼土粒子多量，焼土小ブロック中量。

2層 濃い褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量。

3層 褐色 焼土粒子微量，ローム粒子中量。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが，当遺跡内で確認した他の炉穴との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

### 第13号炉穴（第8図）

位置 調査区の南西部，B10h<sub>0</sub>区。

規模と平面形 長軸1.05m，短軸0.85mの楕円形で，深さは16cmである。

長径方向 N-32°-W。

底面と壁 底面は凹凸があり，中央から北寄りに窪みをもつ。全体的に火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなり，自然堆積である。

土層解説 1層 赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量。

2層 暗赤褐色 焼土粒子中量。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが，当遺跡内で確認した他の炉穴との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。

### 第14号炉穴（第8図）

位置 調査区の南西部，B10h<sub>0</sub>区。

規模と平面形 長軸1.05m，短軸0.78mの不整楕円形で，深さは4cmである。

長径方向 N-34°-E。

底面と壁 底面は平坦で，中央から南東寄りには火熱を受けて赤変硬化している。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

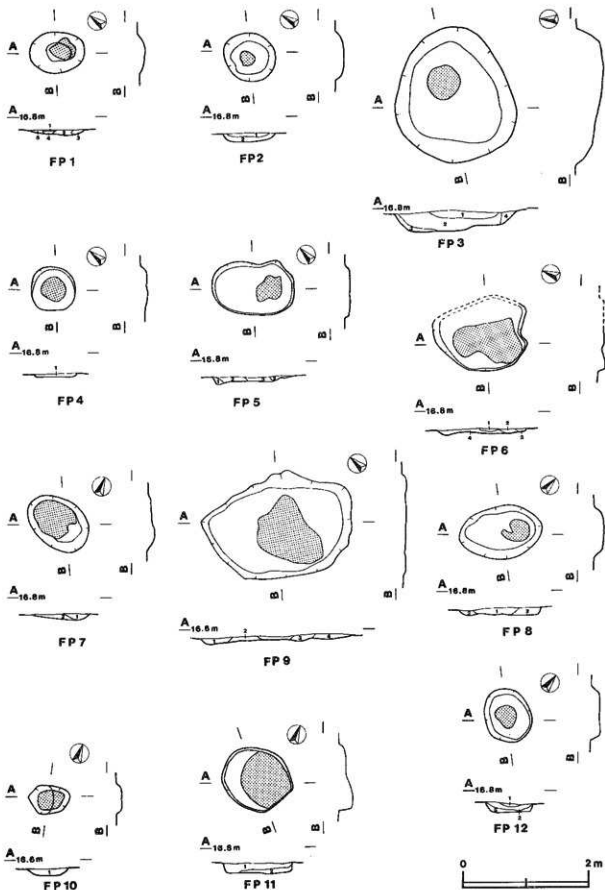
覆土 2層からなり，自然堆積である。

土層解説 1層 濃い赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量。

2層 暗赤褐色 焼土粒子中量。

遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが，当遺跡内から確認された他の炉穴との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。



第7图 炉穴实测图(1)

### 第15号炉穴（第8図）

位置 調査区の南西部，B10h<sub>4</sub>区。

規模と平面形 長軸1.16m，短軸0.99mの楕円形で，深さは6cmである。

長径方向 N-51°-W。

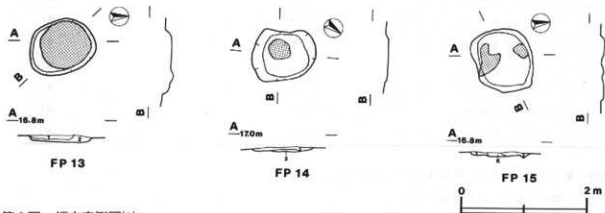
底面と壁 底面は凹凸があり，北壁及び南壁際の一部は火熱を受けて赤変している。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 1層からなり，自然堆積である。

土層解説 1層 暗赤褐色 炭土粒子・小ブロック中量。

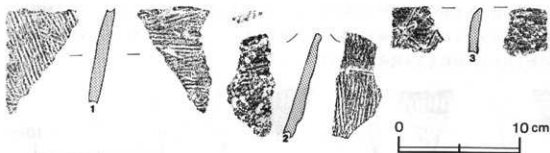
遺物 出土していない。

所見 本跡に伴う遺物は出土していないが，遺構の形態及び当遺跡内で確認した他の炉穴との比較から縄文時代早期の炉穴と考えられる。



第8図 炉穴実測図(2)

第9図1～3はそれぞれ第3，6，10号炉穴出土土器の拓影図である。1は胴部片で，内外面に貝殻条痕が施されている。胎土は砂粒，繊維を多量に含み焼成は普通である。2は波状口縁部片で，口唇部に刻み目をもつ。内面に貝殻条痕が施されている。外面は剥離している。胎土及び焼成は1と同様である。3は口縁部片で，口縁部直下から微隆起線による斜格子目状の文様が施されている。胎土は砂粒を多く含み，焼成は普通である。



第9図 炉穴出土遺物拓影図

### (3) 陥し穴

当遺跡で確認された陥し穴は1基で，調査区のほぼ中央部に位置している。

### 第1号陥し穴（第10・11図）

位置 調査区の中央部，B11d<sub>3</sub>区。

規模と平面形 長軸2.81m，短軸1.89mの楕円形で，深さは2.12mである。

長径方向 N-80°-W。

表2 炉穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	A11j	N-40°W	楕円形	0.88×0.66	12	縦斜	扇状	人為		焼土
2	A11j	N-2°W	楕円形	0.88×0.78	14	外傾	平坦	自然		焼土
3	B10a	N-84°E	楕円形	2.18×1.90	45	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片10点	焼土
4	A10a	N-5°W	円形	0.76×0.74	12	縦斜	凹凸	自然	縄文式土器片1点	焼土
5	A10a	N-42°W	不正楕円形	1.32×0.80	8	外傾	平坦	自然		焼土
6	A10a	N-54°W	不定形	1.46×〔1.15〕	10	外傾	凹凸	自然		焼土
7	A10a	N-55°W	楕円形	1.07×0.78	12	縦斜	凹凸	自然		焼土
8	A10a	N-29°E	楕円形	1.34×0.84	14	外傾	平坦	自然		焼土
9	B10a	N-40°W	不正楕円形	2.40×1.55	8	縦斜	凹凸	自然		焼土
10	B9c	N-74°E	楕円形	0.65×0.45	8	外傾	平坦	自然		焼土
11	B10a	N-56°W	楕円形	1.08×0.90	21	外傾	凹凸	自然		焼土
12	B10a	N-46°W	楕円形	0.88×0.74	14	外傾	平坦	自然		焼土
13	B10a	N-32°W	楕円形	1.05×0.85	16	外傾	凹凸	自然		焼土
14	B10a	N-34°E	不正楕円形	1.05×0.78	4	縦斜	平坦	自然		焼土
15	B10a	N-51°W	楕円形	1.16×0.89	6	縦斜	凹凸	自然		焼土

底面と壁 底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説 1層 褐色 焼土粒子微量、ローム粒子少量。 3層 褐色 焼土粒子微量、ローム粒子少量。  
2層 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量。 4層 暗褐色 ローム粒子・小ブロック少量。

遺物 第1、2層から縄文時代早期及び前期の土器片が51点出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳しい時期については不明である。

第10図1～3は第1号陥し穴出土土器の拓影図である。1は口縁部片で、外削ぎ状の口唇部に棒状工具による刻み目をもつ。口縁部直下から変形爪形文が施され、その上に刺突文が加えられている。2・3は胴部片である。2には貝殻波状文、3には縄文を地文に横走する浮線文が貼られ、その上に細かい刻み目が施されている。1～3の胎土は長石・砂粒を含み焼成は良好である。



第10図 陥し穴出土遺物拓影図

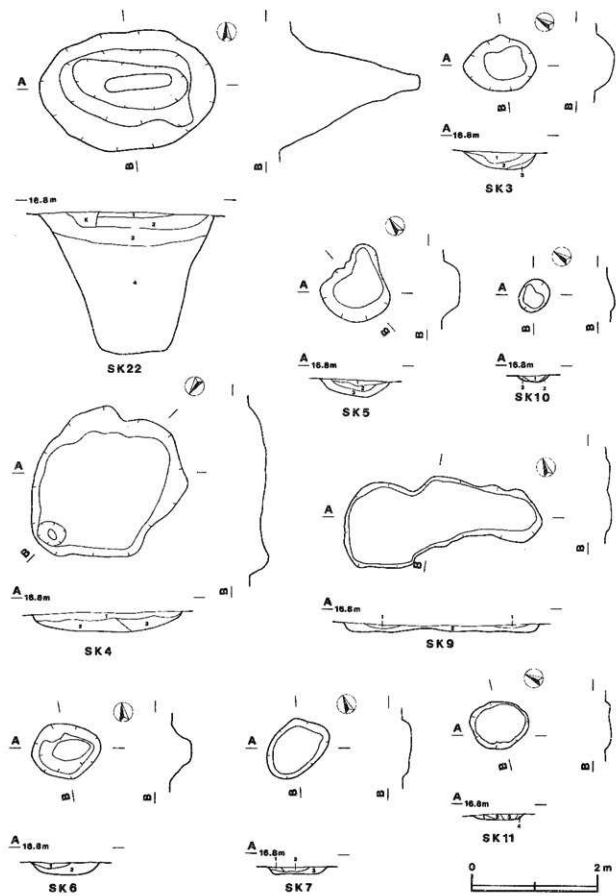
(4) その他の土坑 (第11・12・13図,表3)

当遺跡で確認したその他の土坑は18基で、調査区の西部を中心に位置している。

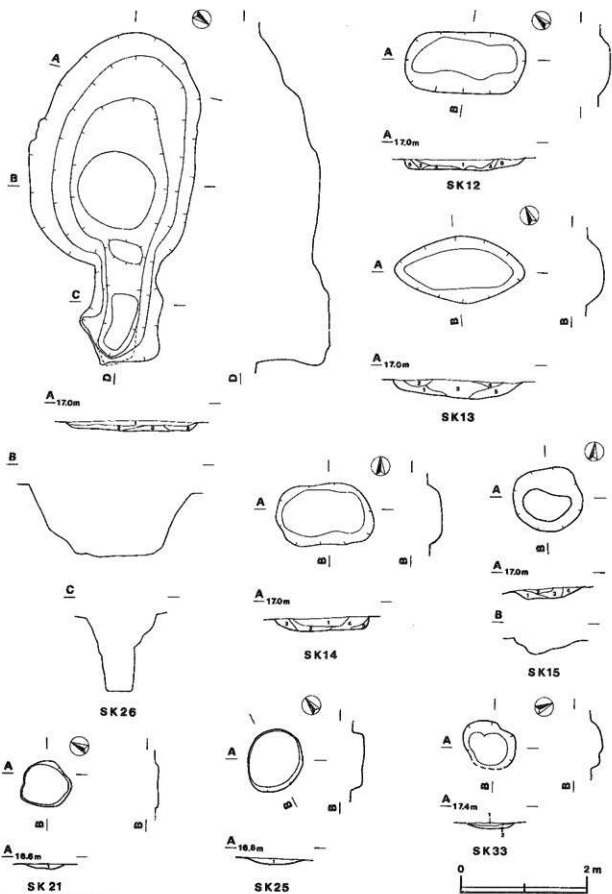
土坑の大半から、縄文時代早期から前期の土器片が出土しており、その時期に構築された土坑と考えられるが、性格は不明である。

なお、鉄滓が多量に出土した第33号土坑及び古墳時代以降のものと思われる井戸についても、合わせて一覧表に記載し報告する。





第11図 陥し穴・土坑実測図



第12圖 土坑実測圖



表3 原遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
3	A11 <sub>1</sub>	N-35°-W	不整形円形	1.16×0.90	30	外傾	風状	自然	縄文式土器片2点	
4	B11a <sub>1</sub>	N-15°-E	不定形	2.70×2.12	33	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片51点	
5	B11b <sub>1</sub>	N-45°-E	不定形	1.24×0.94	27	外傾	平直	自然	縄文式土器片2点	
6	B11a <sub>2</sub>	N-84°-E	楕円形	1.10×0.90	34	外傾	平直	自然	縄文式土器片1点	
7	A11 <sub>2</sub>	N-26°-E	楕円形	1.10×0.78	15	緩斜	風状	自然	縄文式土器片1点	
9	A10 <sub>2</sub>	N-70°-W	不定形	3.14×1.14	8	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片1点	
10	B10a <sub>1</sub>	N-85°-E	楕円形	0.54×0.46	11	緩斜	風状	自然		
11	A10 <sub>1</sub>	N-23°-W	楕円形	0.94×0.76	10	緩斜	凹凸	人為		
12	B10a <sub>2</sub>	N-40°-W	楕円形	1.92×0.98	18	緩斜	平直	自然	縄文式土器片16点	
13	B11 <sub>1</sub>	N-66°-W	楕円形	2.98×1.04	27	外傾	風状	自然	縄文式土器片1点	
14	B10b <sub>1</sub>	N-70°-W	楕円形	1.54×0.96	23	外傾	風状	自然		
15	B10b <sub>2</sub>	N-82°-W	円形	1.12×1.04	25	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器片5点	
21	B10c <sub>1</sub>	N-49°-W	不整形円形	0.82×0.72	5	外傾	平直	自然		
25	B11 <sub>2</sub>	N-62°-E	楕円形	1.04×0.90	20	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片9点	
26	B10b <sub>3</sub>	N-59°-E	不定形	5.25×2.56	116	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片22点	
27	B11 <sub>3</sub>	N-70°-E	不定形	2.22×1.11	63	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片2点 貝1654.3g	ヤマトシジミ
33	C10a <sub>1</sub>	N-57°-E	不整形円形	0.93×0.85	18	外傾	凹凸	自然	弥生 縄文式土器片2点	
34	B10 <sub>1</sub>	N-37°-W	楕円形	2.12×(1.89)	31	外傾	凹凸	自然		
35	A11 <sub>3</sub>	N-0°	円形	3.08×(1.00)	196	垂直		人為		SE-1

第14図1・2はそれぞれ第4、6号土坑出土土器の拓影図である。1は胴部片で、直線及び曲線的な浮線文の上に刻み目が施されている。胎土は長石粒を含み、焼成は良好である。2は口縁部片で、口縁部直下から微隆線による文様が施されている。胎土には繊維を多量に含んでいる。



第14図 土坑出土遺物拓影図

## (5) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文時代早期から中期にかけての土器片、土製品及び石器である。ここでは、縄文式土器片を時期や文様などの特徴から次の第1群から第3群に分類し記述する。土製品及び石器については、一覧表に記載し報告する。

なお、江戸時代の貨幣についてもあわせてここで報告する。

## 第1群 縄文時代早期の土器

## 第1類 撫糸文系土器

## 第2類 貝殻条痕文系土器

## 第2群 縄文時代前期の土器

## 第1類 羽状縄文系土器

## 第2類 貝殻沈線文系土器

### 第3群 縄文時代中期の土器

#### 第1群 縄文時代早期の土器(第15図1~43)

##### 第1類 燃糸文系土器(第15図1~7)

1~5は口縁部で、5以外は口唇部が肥厚して立ち上がる。1は口唇部外面から縄文が密に施されている。胎土は僅かに長石粒を含み、焼成は普通である。2~4は口縁部外面から2には縄文、3、4には燃糸文が疎に施されている。胎土は長石、石英粒を含み、焼成は良好である。5は小形の土器で、口縁部は僅かに外反し、口縁部外面から斜行する燃糸文が疎に施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通である。6は底部に近い胴部片で、縄文が比較的密に施されている。胎土及び焼成は5と同様である。7は胴部片で縄文が疎に施されている。胎土は長石、石英粒を多量に含み、焼成は普通である。1、6は夏島式、2~5、7は稲荷台式土器である。

##### 第2類 貝殻条痕文系土器(第15図8~26、第16図27~43)

8~19は微隆起線によって文様が構成されている口縁部片で、8~14は波状口縁である。20~23は微隆起線と沈線によって文様が構成されている口縁部片で、22以外は波状口縁である。20は微隆起線下に深い沈線が施されている。24~27は沈線によって文様が構成されている口縁部片で、26、27は波状口縁である。28~31は内外面に貝殻条痕が施される口縁部片で、29、30は波状口縁である。32は内外面に絡状体による擦痕が施されている口縁部片である。33~43は胴部片で、33~36は微隆起線によって、37は微隆起線と沈線によって、38~40は沈線によって、41、42は貝殻条痕によって、43は絡状体による擦痕によって文様が構成されている。微隆起線と沈線によって文様が構成される20~23、沈線で文様が構成される24、26、27の口縁部片は口唇部に刻み目が施されている。本類は貝殻条痕を施し、その上に文様が構成される特徴をもつもので、野島式土器である。胎土には砂粒と繊維を多く含んでいる。

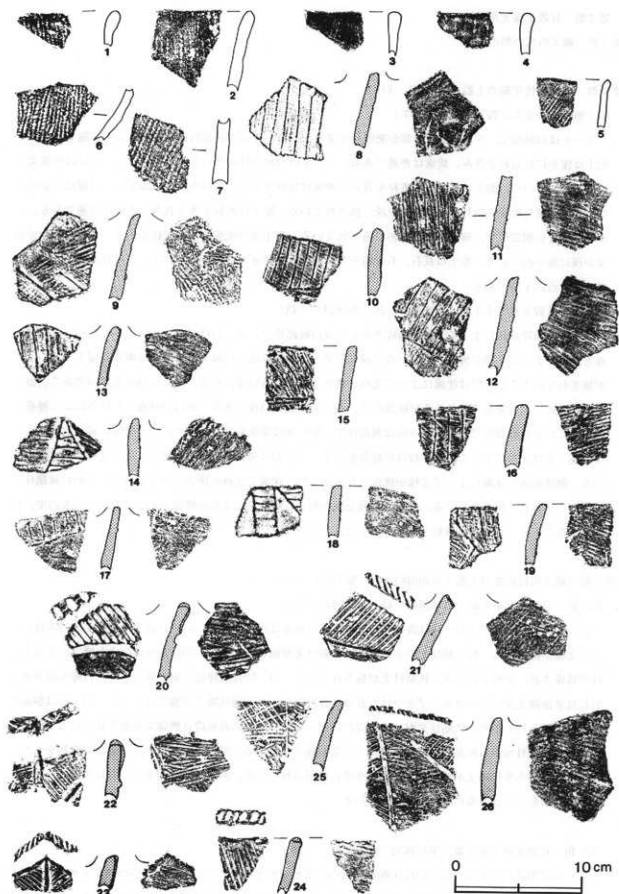
#### 第2群 縄文時代前期の土器(第16図44~46、第17図47~80)

##### 第1類 羽状縄文系土器(第16図44~46、第17図47~61)

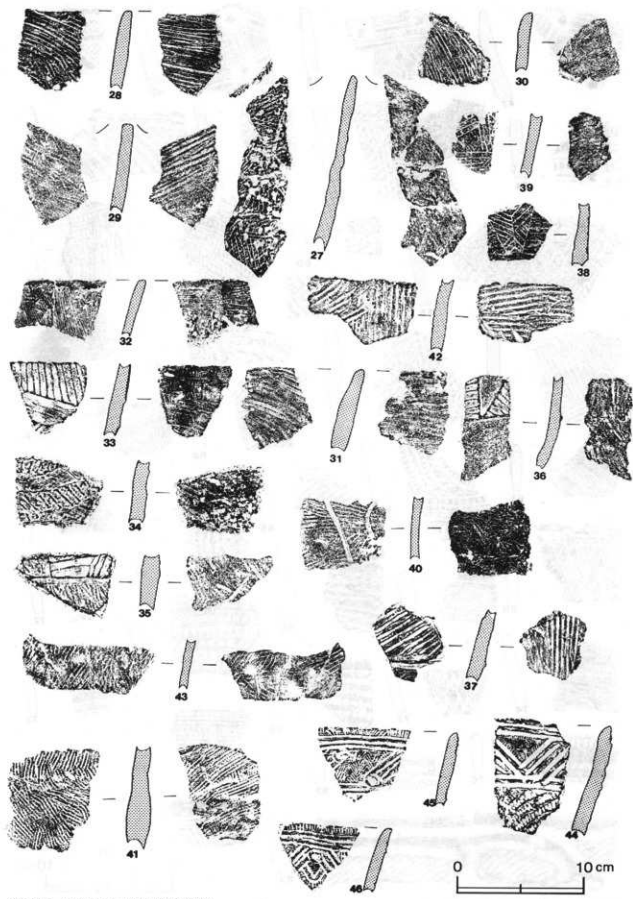
44~52は口縁部片で、47~49は波状口縁である。口唇部は内削ぎ状で、44~49は平行沈線文と刻み目によって文様が構成され、47~49はその上にボタン状貼付文が施されている。50は平行沈線文と縄文によって文様が構成され、その上にボタン状貼付文が施されている。51、52は口縁部に刻み目をもつ。口縁部直下から、51には単節縄文が、52にはループをつけた直前段合燃縄文により羽状縄文が施されている。54~59は胴部片で54には刻み目とボタン状貼付文が、55、57にはループをつけない直前段合燃縄文が施されている。60は底部片で、胴部外面から底部外面にかけてループ文が施されている。61は口縁部片で、口唇部に突起をもつ。口縁部直下から単節縄文が施され、内面は平滑に整形されている。44~60は岡山Ⅰ式、61は黒浜式土器である。本類の胎土には多量の繊維が含まれている。

##### 第2類 貝殻沈線文系土器(第17図62~80)

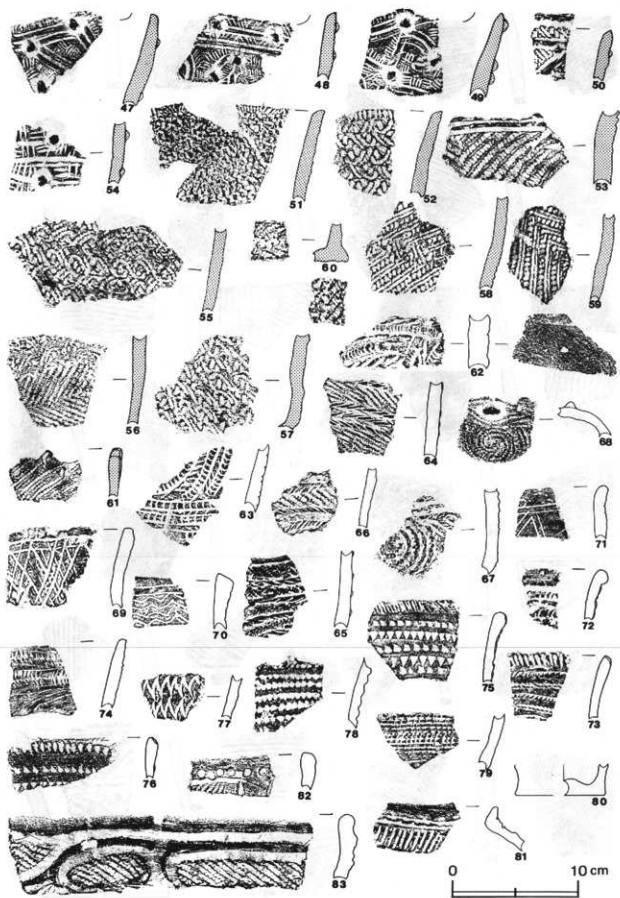
62~67は胴部片である。62、63は沈線の区画内に爪形文が充填されている。64~67は縄文を地文に数条の浮線文を貼り、さらにその上に刻み目が施されている。67には渦巻状の浮線文が施されている。68は口縁部付近の破片で、細い渦巻状の浮線文上に細かな刻み目が施され、瘤状の突起をもつ。69~71は沈線文によ



第15圖 遺構外出土遺物拓影圖(1)

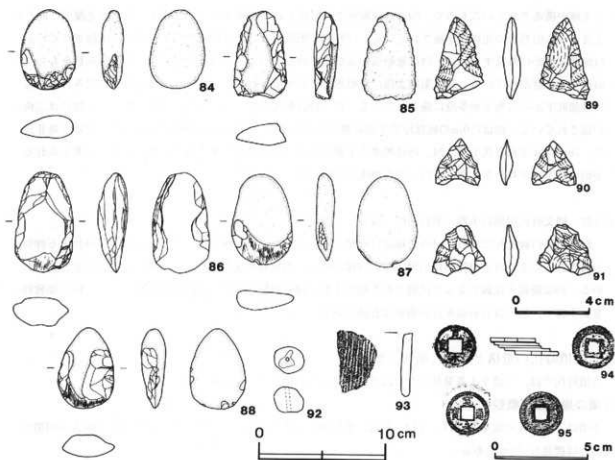


第16图 遺構外出土遺物拓影图(2)



第17图 遺構外出土遺物拓影图(1)





第18回 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)

表 4 遺構外遺物観察表

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
84	石 斧	6.4	4.4	1.9	65.5	表 土	Q 1
85	石 斧	7.1	4.2	1.7	67.6	表 土	Q 2
86	石 斧	8.0	4.6	2.3	93.1	表 土	Q 3
87	石 斧	7.2	4.8	1.5	62.8	T M - 1 周溝覆土中	Q 4
88	石 斧	6.5	4.4	1.6	63.5	T M - 1 覆土中	Q 5
89	石 鏃	2.2	1.4	0.5	0.7	T M - 1 覆土中	Q 6
90	石 鏃	1.4	1.4	0.4	0.5	表 土	Q 7
91	石 鏃	2.4	2.4	0.7	0.3	S D - 1 覆土中	Q 8
92	土 錘	1.8	2.4	1.8	7.4	表 土	D P 1
93	土製円板	4.9	3.0	0.7	15.7	表 土	D P 2

図版番号	器 種	初 鑄 年		出 土 地 点	備 考
		時 代	年 号		
94	寛永通宝	江 戸	1668年	表 土	M27
95	寛永通宝	江 戸	1668年	表 土	M28

て文様が構成されているもので、69は口縁部直下に斜格子状の沈線文が、70は横走る平行沈線下に同じ施文具による山形状の沈線文が施されている。口唇部は肥厚する。71は直線的な平行沈線文が施されている。口縁部は僅かに外反する。72-74は変形爪形文が施されるもので、73は口唇部に斜行する刻み目をもち、内面は平滑に磨かれている。74は条線文間に変形爪形文が充填されている。75、76は口唇部に刻み目をもち、口縁部直下から三角文が多段に施されている。77-79は胴部片で、77、79には貝殻波状文が、78には三角文が施されている。80は77.0cmの底部片で下端は僅かに突出する。62-68は諸磯b式、69-73、77は浮島Ⅱ式、75、76、78は浮島Ⅲ式土器、74、79は興津式土器である。80は浮島、興津式系土器の底部片と考えられる。本製の胎土は砂粒を多く含み、73、79の焼成は良好である。

### 第3群 縄文時代中期の土器 (第17図81-83)

81-83はI口縁部片である。81の口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部直下に交互刺突文と斜行する押し文が施されている。81の口縁部は内彎する。I口縁部直下に円形刺突文を巡らし、沈線内には縄文が充填されている。83は隆線と沈線によって区画された栴門文間に縄文が施されている。81は中幹式、82、83は加曾利EⅡ式土器で、胎土は長石粒を含み焼成は普通である。

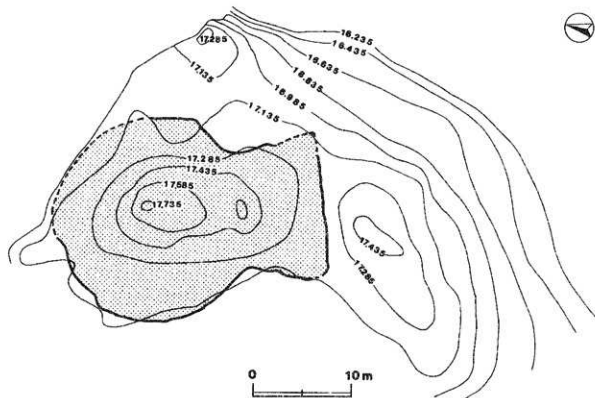
## 2 古墳時代の遺構と遺物 (第19-25図)

古墳時代では、古墳を1基発見した。以下、発見した古墳について記載する。

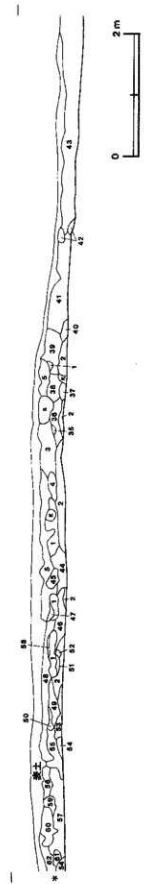
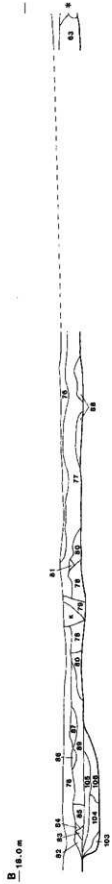
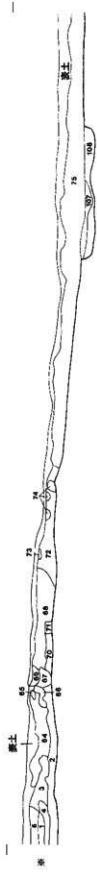
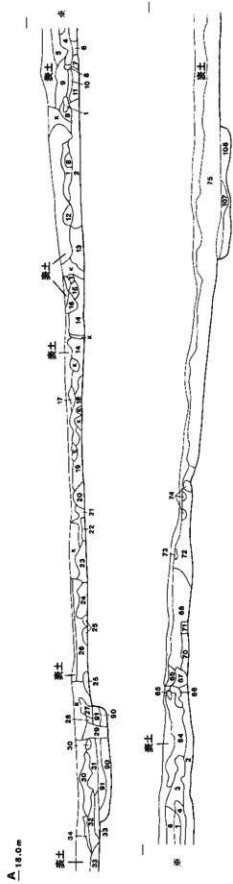
### 古墳の規模及び概観

本墳は、調査区の北東部A11、A12、B11、B12の4つの大グリッドにまたがって位置する前方後円墳で、最高点は標高17.73mである。

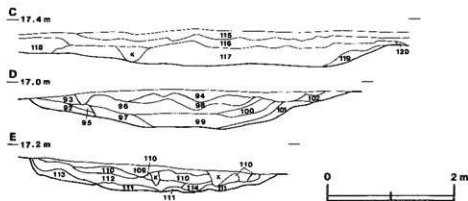
本墳は、N-18°-Wに主軸方向を持つ古墳で、規模は、東西方向の外法26.10m、内法20.60m、南北方向の外法(34.30)m、内法26.20mである。墳丘は、地山を整形した後に盛土をしたものである。



第19図 第1号古墳墳形想定図



第20图 第1号古墳土層断面図(1)



第21図 第1号古墳土層断面図(2)

第1号古墳土層解説

- |           |                          |           |                        |
|-----------|--------------------------|-----------|------------------------|
| 1層 赤褐色    | ローム中ブロック・粘土少量。           | 57層 暗褐色   | 焼土粘土塊。ローム粘土少量。         |
| 2層 暗褐色    |                          | 58層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 3層 暗褐色    | ローム小ブロック散在・粘土少量。         | 60層 淡褐色   | ローム粘土少量。               |
| 4層 暗褐色    |                          | 61層 暗褐色   | ローム大ブロック散在・粘土少量。       |
| 5層 濃い黄褐色  | ローム大・小ブロック散在。粘土少量。       | 62層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 6層 暗褐色    | ローム大ブロック散在。小ブロック・粘土少量。   | 63層 濃い黄褐色 | ローム中ブロック・粘土少量。         |
| 7層 暗褐色    | ローム小ブロック・粘土少量。           | 64層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。         |
| 8層 淡褐色    | ローム粘土少量。                 | 65層 暗褐色   |                        |
| 9層 濃い黄褐色  | ローム大ブロック散在。小ブロック・粘土少量。   | 66層 淡褐色   | ローム粘土少量。               |
| 10層 暗褐色   | 焼土粘土塊。ローム小ブロック・粘土少量。     | 67層 淡褐色   | ローム小ブロック散在・粘土少量。       |
| 11層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。           | 68層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 12層 淡褐色   | ローム小ブロック少量。              | 69層 暗褐色   |                        |
| 13層 淡褐色   | 炭化粘土塊。ローム粘土少量。           | 70層 暗褐色   | ローム小ブロック少量。            |
| 14層 暗褐色   | ローム粘土少量。                 | 71層 暗褐色   |                        |
| 15層 暗褐色   |                          | 72層 暗褐色   | 焼土粘土塊。ローム粘土少量。         |
| 16層 暗褐色   |                          | 73層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 17層 暗褐色   |                          | 74層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 18層 暗褐色   | ローム粘土少量。                 | 75層 暗褐色   | 焼土粘土塊。ローム粘土少量。         |
| 19層 暗褐色   |                          | 76層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 20層 濃い黄褐色 | ローム大ブロック散在・粘土少量。         | 77層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 21層 暗褐色   | 焼土粘土塊。ローム粘土少量。           | 78層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 22層 暗褐色   | ローム小ブロック・粘土少量。           | 79層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 23層 暗褐色   |                          | 80層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 24層 暗褐色   |                          | 81層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 25層 暗褐色   |                          | 82層 暗褐色   | ローム中ブロック少量・粘土少量。       |
| 26層 暗褐色   | 焼土粘土塊。炭化粘土塊。ローム粘土少量。     | 83層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。         |
| 27層 淡褐色   | 焼土粘土塊。ローム粘土少量。           | 84層 暗褐色   | ローム中ブロック少量。            |
| 28層 暗褐色   | ローム大・中ブロック散在。粘土少量。       | 85層 暗褐色   | ローム中ブロック散在。            |
| 29層 暗褐色   | ローム中・小ブロック少量。粘土少量。       | 86層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 30層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。           | 87層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 31層 暗褐色   | ローム小ブロック・粘土少量。           | 88層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 32層 暗褐色   | ローム大ブロック散在・粘土少量。         | 89層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 33層 暗褐色   |                          | 90層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。         |
| 34層 暗褐色   | ローム大ブロック散在・粘土少量。         | 91層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 35層 暗褐色   |                          | 92層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 36層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。           | 93層 暗褐色   | ローム中ブロック散在。小ブロック・粘土少量。 |
| 37層 暗褐色   | ローム小ブロック・粘土少量。           | 94層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。         |
| 38層 暗褐色   | ローム中ブロック散在。小ブロック・粘土少量。   | 95層 暗褐色   | ローム粘土少量。               |
| 39層 暗褐色   | ローム大ブロック散在。小ブロック・粘土少量。   | 96層 暗褐色   | ローム中ブロック少量・粘土少量。       |
| 40層 暗褐色   | ローム粘土少量。                 | 97層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。         |
| 41層 暗褐色   | 炭化粘土塊。ローム粘土少量。           | 98層 暗褐色   | ローム中ブロック散在・粘土少量。       |
| 42層 暗褐色   |                          | 99層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。         |
| 43層 濃い黄褐色 |                          | 100層 暗褐色  | ローム中ブロック散在・粘土少量。       |
| 44層 暗褐色   | ローム中ブロック中層。粘土少量。         | 101層 暗褐色  | ローム中ブロック少量・粘土少量。       |
| 45層 濃い黄褐色 | ローム小ブロック少量・粘土中層。         | 102層 暗褐色  | ローム粘土少量。               |
| 46層 暗褐色   | ローム中ブロック・粘土少量。           | 103層 暗褐色  | ローム中ブロック散在・粘土少量。       |
| 47層 暗褐色   | ローム中ブロック少量・粘土中層。         | 104層 暗褐色  | ローム大ブロック散在。小ブロック・粘土少量。 |
| 48層 暗褐色   | ローム大ブロック散在・粘土少量。         | 105層 暗褐色  | ローム粘土少量。               |
| 49層 暗褐色   | ローム中・小ブロック少量・粘土中層。       | 106層 暗褐色  | ローム大・中ブロック少量・粘土少量。     |
| 50層 暗褐色   | ローム粘土少量。                 | 107層 暗褐色  | ローム中ブロック散在・粘土少量。       |
| 51層 暗褐色   | ローム粘土少量。                 | 108層 暗褐色  | ローム大・中ブロック少量・粘土少量。     |
| 52層 暗褐色   |                          | 109層 暗褐色  | ローム中ブロック少量・粘土少量。       |
| 53層 暗褐色   | ローム大ブロック散在。中・小ブロック・粘土少量。 | 110層 暗褐色  | ローム大ブロック散在。小ブロック・粘土少量。 |
| 54層 暗褐色   |                          | 111層 暗褐色  |                        |
| 55層 暗褐色   | ローム大ブロック散在・粘土少量。         | 112層 暗褐色  | ローム中ブロック散在。小ブロック・粘土少量。 |
| 56層 淡褐色   | ローム中ブロック散在。小ブロック・粘土少量。   |           |                        |

113層	にぶい黄褐色	ローム小ブロック・粒子少量。
114層	黒褐色	ローム粒子少量。
115層	暗褐色	ローム粒子少量。
116層	褐色	焼土粒子微量、ローム粒子中量。
117層	黒褐色	焼土粒子微量、炭化粒子微量、ローム粒子少量。

118層	暗褐色	焼土粒子微量、炭化粒子微量、ローム小ブロック少量・粒子中量。
119層	暗褐色	焼土粒子微量、ローム粒子少量。
120層	暗褐色	ローム粒子微量。

#### 第1号古墳主体部土層調査

1層	黒褐色	ローム中ブロック・粒子少量。
2層	暗褐色	
3層	暗褐色	ローム小ブロック微量・粒子少量。
4層	暗褐色	
5層	にぶい黄褐色	ローム大・小ブロック微量、粒子少量。
6層	暗褐色	ローム大ブロック微量、小ブロック・粒子少量。
7層	暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量。
8層	黒褐色	ローム粒子少量。
9層	にぶい黄褐色	ローム大ブロック微量、小ブロック・粒子少量。

10層	暗褐色	焼土粒子微量、ローム小ブロック・粒子少量。
11層	暗褐色	ローム中ブロック・粒子少量。
12層	暗褐色	ローム小ブロック少量。
13層	暗褐色	炭化粒子微量、ローム粒子少量。
14層	暗褐色	ローム粒子少量。
15層	暗褐色	
16層	暗褐色	

周溝は一部を除き回っている。

埋葬施設は、箱式石棺で、前方部と後円部との境の中央部に位置している。石棺の形状は長方形で、規模は内法の長辺1.73m、短辺0.68mである。掘り方は長方形で、規模は長辺約3.12m、短辺約1.64mである。

出土遺物は、周溝から須恵器の提瓶片が1点、埋葬施設から鉄鏝、小刀、その他流し込んだ縄文式土器片が数点出土している。

#### 墳丘

墳丘の規模は、長軸26.20m、短軸20.60m、高さ(0.70)mである。

墳丘の調査は、東西と南北の2方向に上層観察のためのベルトを残しながら封土の排土作業を進めた。その結果、周溝及び主体部を確認し、前方後円墳であることが明らかとなった。墳丘の構築状況は、旧表土を整形し、その上に盛土して墳丘を構築していることが確認できた。第52、58層はかつて地山であったローム層であり、第47層はロームのブロックや粒子を含む褐色土が帯状に堆積しており、人為堆積であることを明確に示している。

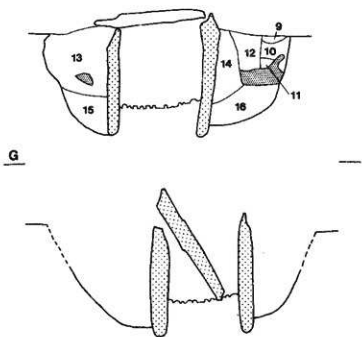
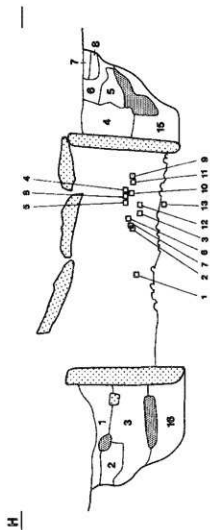
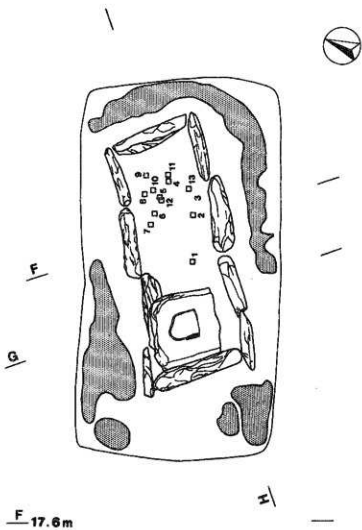
#### 周溝

周溝は、3か所に分かれる。西側の溝は、円弧状で、中央部は括れて浅く、最大幅5.30m、最深部0.61mである。壁は、中央部は外傾し、北部と南部は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は、皿状である。南側の溝は、直線状で、最大幅2.50m、最深部0.28mである。壁は、外傾して立ち上がり、底面は、皿状である。東側の溝は、わずかに円弧状に曲がり、最大幅4.00m、最深部0.42mである。壁は、緩やかに外傾して立ち上がり、底面は、皿状である。

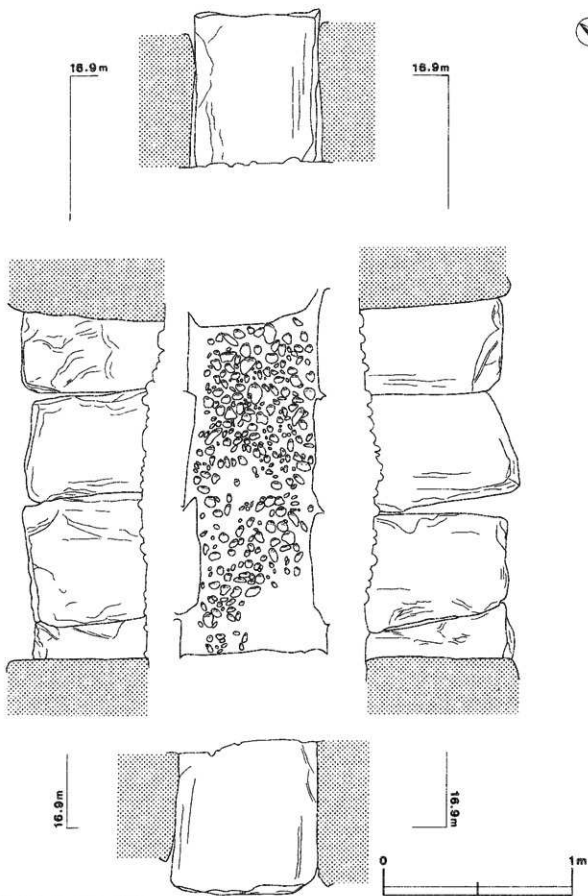
#### 埋葬施設

埋葬施設は、箱式石棺で、前方部と後円部との境の中央部に位置し、蓋石4枚、妻石2枚、側石8枚、計14枚の板石を組み合わせて構築している。蓋石の南西側の2枚のうち1枚は片側が石棺内に落ち、もう1枚は半開きの状態になっており、盗掘の跡がはっきりとしていた。北東側の2枚は、妻石と側石ののっていたが、粘土等の裏込めの跡はなく、開けた後にもとに戻されたものと思われる。床面は、褐色土を用いてほぼ平坦化させ、径13.0～4.0cmの円礫を敷いている。円礫は、南西コーナー付近では敷かれていなかったが、盗掘された際に動かされたもので、造られた当初は全面に敷き詰められていたものと思われる。棺の規模は、内法で長辺1.73m、短辺0.68mの長方形で、主軸方向は、N-52°-Eである。石棺の石材は、雲母片岩を板状に加工したもので、厚さ17.0～5.5cm前後のものを使用している。

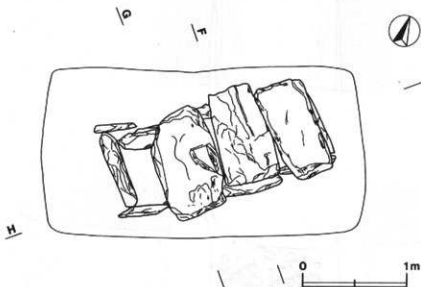
掘り方は、長辺約3.12m、短辺約1.62mの規模で、平面形状は長方形である。主軸方向は、N-69°-Eで、石棺の主軸とは17度の差がある。覆土は褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土で、ほとんどの層に粘土のブロック



第22图 第1号古墳主体部实测图(1)



第23図 第1号古墳主体部展開図



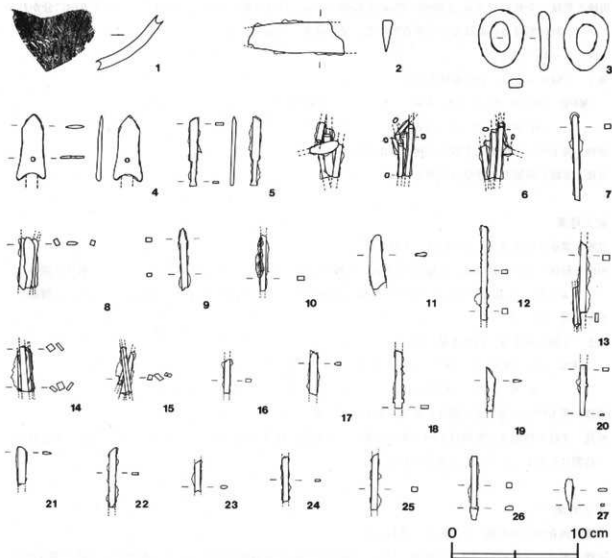
第24図 第1号古墳主体部実測図2)

表5 第1号古墳出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	小刀	(7.5)	2.5	0.7	(29.9)	主体部	M1
3	鐙	(4.6)	3.55	0.7	(21.6)	主体部	M2
4	鉄鏝	(5.1)	2.4	0.4	(5.0)	主体部覆土中	M3
5	刀子	5.4	0.7	0.3	4.6	主体部	M4
6	鉄鏝	(4.6)			(14.3)	主体部	M5
7	鉄鏝	(6.9)	0.5	0.35	(5.1)	主体部	M6
8	鉄鏝	(4.0)	1.6	0.8	(10.9)	主体部	M7
9	鉄鏝	(4.9)	0.55	0.4	(4.5)	主体部	M8
10	鉄鏝	(4.4)	0.5	0.3	(4.9)	主体部	M9
11	刀子	(4.3)	1.0	0.35	(3.5)	主体部覆土中	M10
12	鉄鏝	(7.5)	4.5	0.4	(5.7)	主体部覆土中	M11
13	鉄鏝	(6.8)	9.5	0.7	(6.6)	主体部覆土中	M12
14	鉄鏝	(3.5)	1.1	1.0	(7.4)	主体部覆土中	M13
15	鉄鏝	(3.9)	0.9	1.0	(6.9)	主体部覆土中	M14
16	鉄鏝	(2.7)	0.5	0.3	(1.6)	主体部覆土中	M15
17	鉄鏝	(3.6)	0.6	0.3	(2.3)	主体部覆土中	M16
18	鉄鏝	(4.6)	0.6	0.3	(3.3)	主体部覆土中	M17
19	鉄鏝	(3.5)	0.7	0.2	(2.1)	主体部覆土中	M18



図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
20	鉄 鏃	(4.0)	0.5	0.4	(2.8)	主体部 覆土中	M19
21	鉄 鏃	(3.0)	0.7	0.2	(2.1)	主体部 覆土中	M20
22	鉄 鏃	(4.8)	0.5	0.2	(2.7)	主体部 覆土中	M21
23	鉄 鏃	(2.5)	0.5	0.4	(1.4)	主体部 覆土中	M22
24	鉄 鏃	(3.6)	0.5	0.25	(2.0)	主体部 覆土中	M23
25	鉄 鏃	(4.55)	0.5	0.45	(3.5)	主体部 覆土中	M24
26	鉄 鏃	(5.0)	0.45	0.4	(3.5)	主体部 覆土中	M25
27	鉄 鏃	(2.5)	0.7	0.3	(1.1)	主体部 覆土中	M26



第25図 第1号古墳出土遺物実測・拓影図

クヤ粒子を含み、粘性は弱く、しまりはさほど強くない。なお、中層には粘土が帯状に堆積した部分があるが、妻石や側石から離れた位置に堆積している。

遺物

周溝及び石棺からは、須恵器(提瓶)片、鉄製品及び流れ込みと思われる縄文式土器片が出土している。1の

須窓器の提榊の胴部片は、西側の溝の中央部の覆土上層から出土している。2～27の鉄製品は、石棺の中央部から北東の表石にかけての、覆土の中層と下層から出土している。また、石棺の中央部から北東の表石にかけての覆土下層から、少量の人骨(頭蓋骨片と歯)が出土したが、性別、年齢などは不明である。

### 3 その他の遺構(第3・26図)

#### (1) 溝

当遺跡で確認した溝は4条で、調査区の南東部(第1～3号溝)及び北東部(第4号溝)に位置している。

#### 第1号溝

位置 調査区の南東部、C11f<sub>2</sub>区～C11b<sub>5</sub>区。

規模と形状 全長約22.6m、上幅60～82cm、下幅40～70cmでほぼ直線的に走り、C11d<sub>2</sub>区で南東方向に分かれて  
いる。断面形は浅い皿状ないし逆台形状で、深さは8～16cmである。

方向 N-48°-E。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説 1層 褐色 ローム粒子少量。

3層 褐色 ローム粒子・中ブロック微量。

2層 暗褐色 ローム粒子少量。

遺物 覆土中から縄文式土器片が極少量出土している。

所見 本跡の時期及び性格は不明である。

#### 第2号溝

位置 調査区の南東部、C10h<sub>9</sub>区～B11j<sub>6</sub>区。

規模と形状 全長約40.8m、上幅72～120cm、下幅50～100cmである。断面形は皿状ないし逆台形状で深さは10  
～24cmである。形状はC10g<sub>6</sub>区とC10f<sub>1</sub>区間で東方向に「コ」の字状に屈曲し、北東端部は東方向に彎曲する。

方向 N-50°-E。

覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説 1層 暗褐色 ローム粒子・中ブロック少量。

3層 褐色 ローム粒子・小ブロック少量。

2層 褐色 ローム粒子中量

4層 褐色 ローム小ブロック少量。

遺物 覆土中から縄文式土器片が極少量出土している。

所見 本跡の時期及び性格は不明であるが第1、3号溝とはほぼ平行に走っていることから第1、3号とはほぼ同  
時期に存在していたことが考えられる。

#### 第3号溝

位置 調査区の南東部、C10g<sub>6</sub>区～B11j<sub>6</sub>区。

規模と形状 全長約35.0m、上幅90～116cm、下幅38～78cmで直線的に伸びている。断面形は皿状で深さは18～  
28cmである。

方向 N-50°-E。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説 1層 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子少量。

3層 褐色 ローム粒子微量。

2層 暗褐色 ローム粒子少量。

遺物 覆土中から縄文式土器片が極少量出土している。

所見 本跡の時期及び性格は不明であるが、第1、2号溝と方向がほぼ同じことから第1、2号溝と同時期に存在していたことが考えられる。

#### 第4号溝

位置 調査区の北西部、A10f<sub>8</sub>～A11e<sub>3</sub>区。

規模と形状 全長約29.0m、上幅80～136cm、下幅68～74cmで、A11h<sub>9</sub>区ではほぼ直角に屈曲する。北東端部及び北西端部は調査区外に延びている。断面形は「U」字状で、深さは50～56cmである。

重複関係 A11e<sub>2</sub>区で第1号井戸の東側及びA10g<sub>8</sub>区で第6号炉穴の北東部を掘り込んでいる。

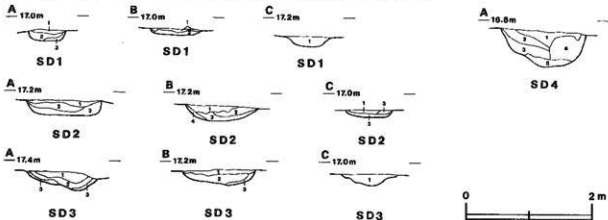
方向 N-45°-E。

覆土 5層からなり、人為堆積である。

- 土層解説 1層 暗褐色 ローム粒子少量。 4層 褐色ローム粒子・小ブロック少量。  
2層 褐色 ローム粒子微量。 5層 褐色ローム粒子少量。  
3層 褐色 ローム粒子少量。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが、位置及び形状から根切り溝と考えられる。



第26図 第1～4号溝土層断面図

#### 4 まとめ

当遺跡は、縄文時代と古墳時代の複合遺跡である。ここでは、各時期ごとに概観し、まとめとしたい。

#### 縄文時代

当遺跡で確認した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、炉穴15基、陥し穴1基、土坑17基である。

竪穴住居跡は、調査区の西端部に位置し、諸磯b式、浮島II・III式、興津式に比定される上器片が出土していることから、本跡は縄文時代前期後葉に構築された住居跡と考えられる。調査区内から確認した住居跡は1軒であるが、縄文時代の集落は調査区北西側に広がる台地平坦部に形成されていた可能性が考えられる。

炉穴は、調査区の西部に位置し、2～5基を1単位の5グループに分けられる。出土した遺物は少量ではあるが、早期後葉の野島式に比定される土器片が出土していることから、これらの炉穴はその時期に構築されたものと考えられる。

遺物は、縄文時代早期前葉から中期後葉にかけての上器片、石斧、石鏃等が出土している。出土した土器片

は野島式、関山式、浮島式土器がほとんどを占めている。

以上のことから、当遺跡は縄文時代早期前葉から中期後葉にかけて人々の生活の場として利用されていたが、最盛をむかえるのは早期後葉から前期後葉にかけてであると考えられる。

#### 古墳時代

第1号古墳が当該期の遺構で、調査区の北東部で発見した。規模は、外法で26.10m×(34.30)m、現況で高さ0.70mの前方後円墳である。周溝は、一部を除き回っている。埋葬施設は、箱式石棺で、前方部と後門部との境の中央部にあり、蓋石4枚、妻石2枚、側石8枚、計14枚の板石(雲母片岩)を組み合わせて構築している。床面には、円礫が敷かれている。出土遺物は、周溝から須恵器の提瓶片が1点、埋葬施設から鉄鍔、小刀、鈎が出土している。

本墳の時期は、周溝からの出土遺物が須恵器片1点だけであり、主体部からの出土遺物も少数であったために判断は難しいが、主体部の箱式石棺という形式及び全体の形状から判断すると、7世紀代に構築されたものと思われる。

なお、当跡の周辺で確認された古墳の多くは円墳であるが、当跡の南方約1kmに位置する庚塚遺跡には小規模な前方後円墳が確認されており、本墳との関連が想定される。

当時期の住居跡は発見できなかったが、今回の調査区あたりは墓域とされ、本墳を構築した人々の集落は、北西方向の台地上に形成されていたものと思われる。

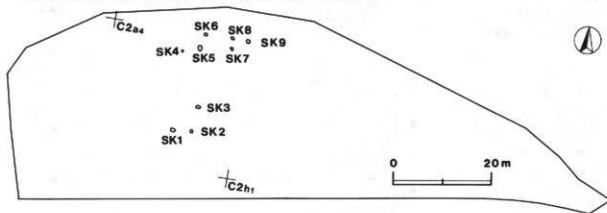
## 第4章 沼崎遺跡

### 第1節 遺跡の概要

沼崎遺跡は、守谷町の北東部、谷和原村との境に位置している。遺跡は北西から南東にかけて広がる小貝川沿いの低地を臨む台地斜面部にあり、標高は約12mである。現況は山林で、面積は2,779㎡である。

今回の調査によって確認された遺構は、土坑9基で時期は出土遺物もなく不明である。

遺物は遺構外から縄文式土器片(早期～前期)が12点出土している。

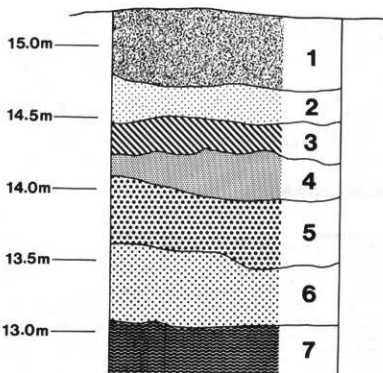


第27図 沼崎遺跡全体図

### 第2節 基本層序

沼崎遺跡においては、調査区の南西部、C2i<sub>a</sub>区にテストピットを設定し、第28図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、厚さ約40～50cmの暗褐色土でローム粒子を少量と炭化粒子を微量含む表土である。第2層は、厚さ約20～40cmの褐色土でローム粒子及びローム大ブロックを少量含むソフトローム層である。第3層は厚さ30cm前後の黒褐色土で、ローム粒子及びローム小ブロックを少量含んでいる。第4層は厚さ約15～30cmの暗褐色土で、ローム大ブロックを微量に含んでいる。第5～7層は厚さ50cm前後の締まりの強い褐色土で、ハードローム層である。

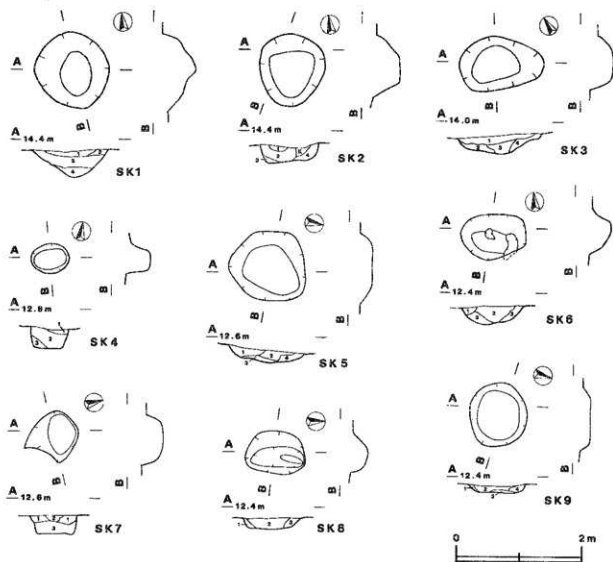


第28図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

# 1 土坑 (第29図, 表6)

当遺跡で確認した土坑は9基で、調査区の中央から北寄りにまとまって存在している。いずれも出土遺物がなく時期や性格は不明である。ここでは、9基の土坑について一覧表に記載し報告する。



第29図 土坑実測図

### 第1号土坑土層解説

- 1層 褐色 色 ローム粘土少量。
- 2層 暗褐色 色 ローム小ブロック・粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム中ブロック散在、小ブロック・粘土少量。
- 4層 暗褐色 色 ローム中・小ブロック少量、粘土中量。

### 第2号土坑土層解説

- 1層 暗褐色 色 炭化粘土微量、ローム粘土少量。
- 2層 暗褐色 色 ローム小ブロック散在、粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム粘土中量。
- 4層 暗褐色 色 ローム小ブロック少量・粘土中量。

### 第3号土坑土層解説

- 1層 暗褐色 色 ローム粘土少量。
- 2層 暗褐色 色 ローム単人、大ブロック散在、小ブロック・粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム小ブロック・粘土少量。
- 4層 暗褐色 色 ローム粘土少量。

### 第4号土坑土層解説

- 1層 暗褐色 色 ローム小ブロック散在・粘土少量。
- 2層 濃い黄褐色 色 ローム文、小ブロック・粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム小ブロック・粘土少量。

### 第5号土坑土層解説

- 1層 暗褐色 色 炭化粘土微量、ローム小ブロック少量・粘土中量。
- 2層 暗褐色 色 炭化粘土微量、ローム粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム小ブロック・粘土少量。
- 4層 暗褐色 色 炭化粘土微量、ローム粘土微量。

### 第6号土坑土層解説

- 1層 暗褐色 色 炭化粘土微量、ローム小ブロック・粘土少量。
- 2層 暗褐色 色 ローム粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム小ブロック散在・粘土少量。

### 第7号土坑土層解説

- 1層 暗褐色 色 ローム粘土少量。
- 2層 暗褐色 色 ローム小ブロック・粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム大ブロック散在、小ブロック・粘土少量。

### 第8号土坑土層解説

- 1層 暗褐色 色 ローム小ブロック少量・粘土微量。
- 2層 濃い黄褐色 色 ローム中ブロック散在、小ブロック・粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム大ブロック散在・粘土少量。

### 第9号土坑土層解説

- 1層 濃い黄褐色 色 ローム小ブロック・粘土少量。
- 2層 暗褐色 色 ローム単人・中ブロック散在、粘土少量。
- 3層 暗褐色 色 ローム粘土少量。
- 4層 暗褐色 色 ローム小ブロック・粘土少量。

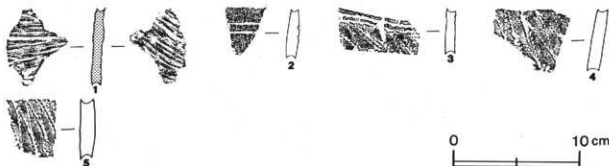
表6 沼崎遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土
1	C <sub>2</sub> f <sub>2</sub>	N-10°-W	円形	1.26×1.20	54	外傾	皿状	自然
2	C <sub>2</sub> f <sub>8</sub>	N-9°-E	楕円形	1.16×1.04	42	外傾	平坦	自然
3	C <sub>2</sub> d <sub>8</sub>	N-58°-W	楕円形	1.36×0.86	35	外傾	皿状	自然
4	C <sub>2</sub> a <sub>7</sub>	N-82°-E	楕円形	0.60×0.50	38	外傾	平坦	自然
5	C <sub>2</sub> a <sub>6</sub>	N-9°-W	不整形円形	1.22×1.10	20	緩斜	平坦	自然
6	C <sub>2</sub> a <sub>8</sub>	N-77°-W	不整形円形	1.04×0.72	34	外傾	皿状	自然
7	C <sub>2</sub> a <sub>9</sub>	N-86°-W	不定形	0.86×0.82	34	外傾	皿状	自然
8	C <sub>2</sub> a <sub>3</sub>	N-67°-W	楕円形	0.96×0.68	28	外傾	皿状	自然
9	C <sub>2</sub> a <sub>1</sub>	N-24°-W	円形	1.00×0.92	16	緩斜	平坦	自然

## 2 遺構外出土遺物(第30図)

当調査区からは、遺構に伴わない縄文式土器片が極少量出土している。

第30図1～5は出土した土器の拓影図である。全て胴部片で、1には内・外面に貝殻痕文が、2には横走する平行沈線文が施されている。3～5は同一個体片で、貝殻波状文が施されている。3は貝殻波状文を地文に横走する結節状沈線文が施されている。1は縄文時代早期末葉の茅山下層式、2～5は縄文時代前期後半の浮島Ⅱ式土器と考えられる。



第30図 遺構外出土遺物拓影図

## 3 まとめ

今回の調査では確認した遺構、遺物が少なく遺跡の時期や性格をとらえることができなかった。調査区が緩やかな斜面部であったことから、出土した縄文式土器片は遺跡の南側から流れ込んだもので、縄文時代の集落は遺跡南側に広がる台地平坦部に形成されていた可能性が考えられる。

写 真 图 版





沼崎遺跡・原遺跡俯瞰



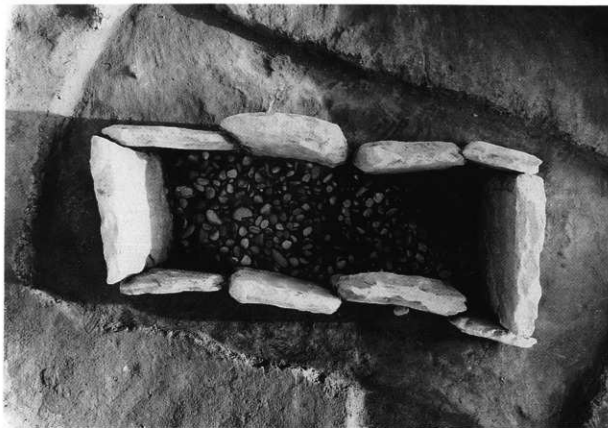
原遺跡全景



第1号古墳



第1号古墳主体部俯瞰



第1号古墳主体部俯瞰（底部）



第1号古墳主体部（北西より）



第1号古墳主体部及び掘り方俯瞰



第1号古墳主体部表石及び側石の掘り方（北東より）



第1号古墳Bベルト土層断面



第1号住居跡



第1号住居跡P1（北より）



第1号住居跡P2〔手前〕，P3〔後方〕（北東より）



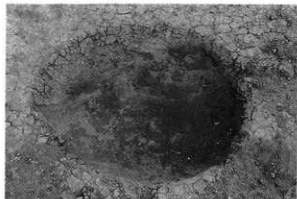
第25号土坑 [手前]，第1号溝 [左奥]，第2号溝 [右奥]



第3号溝



第1号陥し穴



第2号炉穴



第3号炉穴



第5号炉穴



第9号炉穴



第10号炉穴



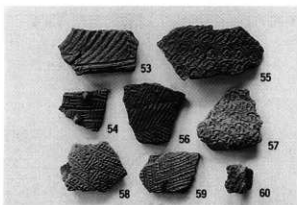
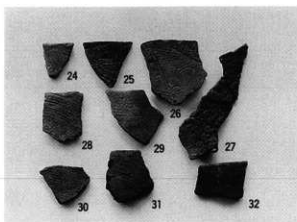
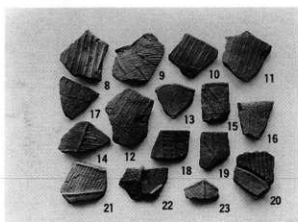
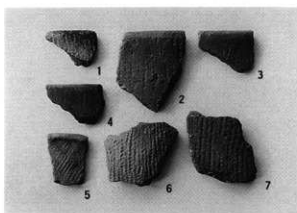
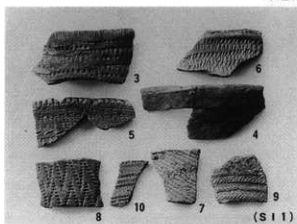
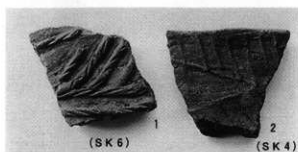
第12号炉穴



第33号土坑

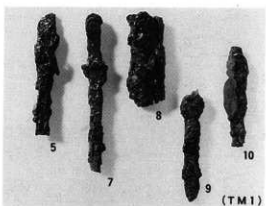
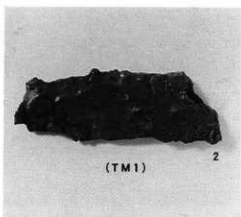
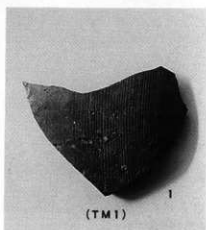
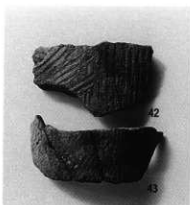


第27号土坑



出土遺物 (S11, SK4・6, 遺構外)





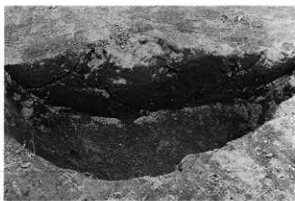
出土遺物 (遺構外, TM1)



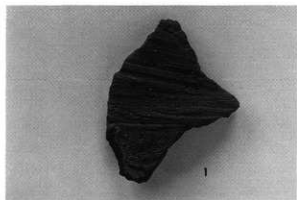
調査終了状況



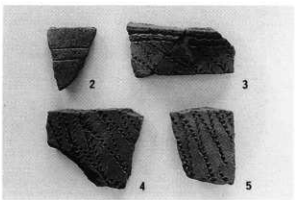
第1号土坑



遺構外出土遺物



第6号土坑土層断面図



茨城県教育財団文化財調査報告第112集

常磐新線建設工事地内  
埋蔵文化財調査報告書 1

原 遺 跡

沼 崎 遺 跡

平成 8 (1996) 年 3 月 25 日印刷

平成 8 (1996) 年 3 月 29 日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2  
T E L 029-225-6587

印刷 富上オフセット印刷株式会社  
水戸市根本 3 丁目 1534-2  
T E L 029-231-4242代